



## 会員のひろば

### 床屋

札幌市医師会  
北海道がんセンター 荻田 征美

5年前、夏の暑い時期に脳梗塞になったが、幸いにもわずかな不全麻痺を残すのみで、お盆を過ぎた頃には退院する事ができた。自宅に戻って、リハビリで通っていた真駒内公園からの帰り道、スーパーの隣にある床屋が目止まった。そういえば退院してから床屋に行っていない事を思い出し、急遽、散髪に立ち寄ることにした。入ってみると開業して間もないと見えて、室内は真新しく理髪師も若々しかった。何となく「若者の店だなあ」という感じが強く、少し気恥ずかしい気がしたが、そのまま散髪を任せることにした。直ぐに順番がきて散髪台に座ると店内にモダンジャズが流れているのに気がついた。「この店にはこういう曲が合うね。」と言ったら、店長が「お客さん、ジャズがお好きですか。」と聞くので、「うん、こういう所で聞くには雰囲気良く合っているね。」と答えた。その後、毎月通っているが、店では私の事を覚えていて、私が行くとモダンジャズをかけてくれる。ジャズを聞きながら散髪、シャンプー、ひげ剃り、マッサージをして貰い、良い心地に浸る。店は中通りに面した角地にある。そのため道路を通り過ぎる車のエンジン音や車のドアが閉じる音、車が発進して遠ざかる音などは典型的な都会の喧噪であるが、ベースやピアノの低いリズムで構成されるモダンジャズには雑音として苦にならない、というよりバックグラウンドの雰囲気としては寧ろ釣り合っているといってきた。

学生時代の遠い昔、ジャン・ギャバンやアラ

ン・ドロン出演するフランスのギャング映画で、ルイ・マルという若い監督がバックグラウンドミュージックにモダンジャズを使用した。モダンジャズといえばアメリカがご本家で、それまでヨーロッパでは映画音楽に使われたことが無かった。加えてカラー映画の最盛期に取って白黒の画面であった。そこにモダンジャズが流れたので、物事の善悪や色彩による感応を完全に吹き飛ばして単調なモノクロの中に都会の焦燥感と無目的な情熱のみを凝縮させた効果は強烈な印象を与え、ともすれば目的を見失いがちな学生として都会で暮らす自分に共感するものが有った。当時へのノスタルジアがモダンジャズに、さながら竈の残り火となって燻っていた。それは老境の私の中に今も残っている若さへの郷愁に他ならない。

休日になると、天気の良い日には足を引きずりながら庭いじりをする、雨の日には二階に上がって本を読む、などのほとんど隠居生活であるが、月に一度位の割合で東京出張がある。飛行機、モノレール、地下鉄を乗り継いででの会議出席である。慌ただしくほとんど日帰りの出張であるが、都会の雑踏に巻き込まれながら、帰って来てみると何かしら忘れかけていた元気を貰っているような気がする。月に一度の床屋通いもそんなところに一脈通ずるものがある。過去のフラッシュバックも手伝ってモダンジャズを聞きながらやはり都会の元気を貰う気がして、嬉しくなってくる。そして整髪にしばし身を委ね「お疲れさまでした。一休みしながらコーヒー等如何ですか。」と仕上げを告げられる。コーヒーを辞してから徐に店を後にすると、今ではすっかり丈夫になった足のリハビリのために2kmほどの道のりを歩いて帰宅するのである。来月の散髪を楽しみにしながら…。

## “元気” その3

札幌市医師会 門脇 純一

昔の日本人の顔つきをみると、“元気”がみなぎっていたという。ところが、いまの人には、それが無い。しかも、大人も子どもも。何故だろう？ 開発途上国の子どもをテレビで見ると、目が輝き、明るい表情で、わが国の子どもと対象的である。経済的背景の違いからこの顔の表情の違いを説明するとどうなるか、ふと戸惑ってしまう。

顔の表情は心の鏡だとすると、生活、将来への不安に対しての陰りが、このような像として見えているのであろうか。まさか、経済上の高低がこうさせているとは言えないでしょう。金銭に恵まれても、必ずしも心には、何か充足されていないものが存在していると考えるのは、どうだろうか。

最近の高校生の国際調査で、日本の高校生は、自分の人生、将来に夢・希望を持つ比率が最低と報告されている。寂しい。

札幌「元気基金」というのが、あるそうだ。短期資金の融資制度で、利用は順調であるとのこと。日本医師会では、「からだ元気科」というテレビ番組を全国放送しており、先日の番組では会長の植松治雄氏が、地域医療が一丸となって取り組むチーム医療を強調している。日医ニュースのオピニオン欄に、玄侑宗久氏は病気もうつるが、元気もうつる。元気な医師の会話こそが、病気に最も効くと述べており、検査に頼りがちな医師の姿に忠告を発しているように聞こえる。

札幌市長の上田文雄氏は「札幌元気ビジョン」を掲げ、元気になる街の取組、元気の源は何よりも健康をあげ、安心して、この街で生活できる体制作りを挙げている（札幌通信220号）。

この頃は長らく低迷していた経済を元気づけ、心に活をいれる表現が新聞、テレビなどで多く見聞される。

不景気については、一部責任のある行政者も、勤勉で優秀な日本国民を持ち上げ、喪失しかけた自信の回復に刺激を与えている。精神論で人を変え、動かすことは、かつてほど容易でなくなっている世相にみえるが。

### 専門部から

人口動態職業・産業調査へのご協力をお願い  
—出生、死亡証明書等を「職業・産業例示表」とともに交付してください—

◇医療政策部◇

今年が国勢調査の実施年にあたり、厚生労働省では平成17年4月から平成18年3月まで「平成17年度人口動態職業・産業調査」を実施します。

届出には、各医療機関で発行する出生証明書等の添付が必要であり、出生・死亡および死産の届出書を直接医療機関から受け取る方が多いと思われることから、厚生労働省から日本医師会を通じて医療機関における協力方の依頼がありました。

「職業・産業例示表」は所管の保健所から各医療機関に配布されますので、届出書とともに配付していただきますよう、ご協力をお願いいたします。